

となみ散居村を学ぶ

< 第 6 回 >

・期 日 令和7年11月8日(土) 13時30分～15時00分

・テーマ ～となみ散居村のひとづくり資源～

「 猛将 木曾義仲

～倶利伽羅峠に想いを馳せて～ 」

・講 師 小矢部市観光課 義仲・巴プロジェクト推進班

課長 兼 班長 船見 幸広 氏



源義仲騎馬像 (小矢部市 埴生護国八幡宮境内)



埴生護国八幡宮
(小矢部市 国重要文化財)

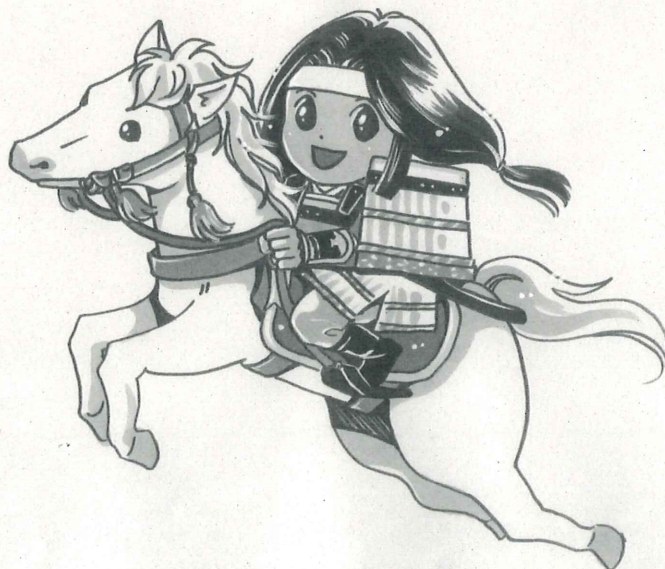


木曾義仲像(加賀市 篠原古戦場)

火牛の像(小矢部市 倶利伽羅古戦場)

「猛将 木曾義仲」ここがポイント！

- 久寿元年（1154）木曾義仲生誕。生誕地は武蔵国（埼玉県嵐山町）と伝わる。
- 駒王丸（義仲の幼名）2歳のときに父が討たれ、信濃国（長野県）の中原兼遠にかくまわれる。
- 治承4年（1180）平家の専横に対し、以仁王の令旨を得て挙兵。
- 寿永2年（1183）5月、倶利伽羅峠の戦いにて平家の大軍を撃ち破る。
- 源氏一族の中でいち早く京へ進軍し、平家を都から追いやる。
- 京の都の治安回復に苦心するが、後白河法皇と対立し、法住寺殿を焼き討ちする。
- 寿永3年（1184）1月、近江国（滋賀県大津市）にて討ち死にする。享年31。
- 義仲寺（滋賀県大津市）、徳音寺（長野県木曾町）、法観寺（京都府京都市：八坂の塔）などに、義仲の墓・塚が残されている。
- 日本各地に義仲ゆかりの地があり、数多くの史跡・伝承が残されている。
- 義仲が現在の小矢部市に滞在した期間はごくわずかであるが、倶利伽羅峠の戦いで勝利しなければ入京はできなかったと考えられるため、この戦いの意義は大きい。
- 歴史的解釈において、義仲は「悪者」というイメージが強いが、情報収集の成果により、本当は「義理人情に厚い人物」であったと考えられている。



木曾願書

歸命頂禮 八幡大菩薩 曰域朝廷之本主 累世明君之曩祖
為守室祚為利蒼生 顯三身之金容 開三所之権扉
爰項年之間 有平相國 恣管領四海 惱亂萬民 猥蔑萬衆
焚燒諸寺 已足佛法之讎 王法之敵也 義仲苟生弓馬之家
僅繼箕裘之塵 見聞彼暴惡 不能顧思慮 任運於天道
投身於國家 試起義兵 欲退凶器 圍戰雖舍兩家之陣
士卒未得一塵之勇之處 今於一陣上旌之戰場
忽拜三所和光之社壇 機感之純熟已明 兇徒之誅戮無疑矣
降歡喜之淚 銘渴仰於肝 就中曾祖父前陸奥守義家朝臣
寄附身宗廟氏族 自号名於八幡太郎以降
為其門葉者無不歸敬矣 義仲為其後胤 傾頭年久
今起此大功 喻如嬰兒以蠶量巨海 螳螂取斧向奔車
然間為君為國起之 為身為私不起志之至 神鑒在暗
憑哉 悅哉 伏願冥慮加威靈神合力勝決一時 怨退四方
然則丹祈相叶冥慮 幽賢可成加護者 先今見一之瑞相給
仍祈誓如件

壽永二年五月十一日

源義仲 敬白

※ 「平家物語」 「源平盛衰記」 「源平俱利伽羅合戰記」 參照

猛将木曾義仲

義仲・巴の魅力を全国に！
大河ドラマ誘致プロジェクト
発動中!!



「倶利伽羅峠に想いを馳せて」

第8回 源氏の御曹司

駒王丸が木曾へたどり着いた翌日、中原兼遠の屋敷には、兼遠の主だった家臣達が集まり、広間につめていた。

あらかじめ事情は説明されていたものの、いざ源氏の由緒ある御曹司が木曾に落ち延びてきたことから、座はどことなくざわついていた。そこに、兼遠が駒王丸を引き連れ、現れた。

広間は一瞬にして静かになった。

兼遠のすすめに従い、駒王丸は上座に着座した。兼遠は下段の家臣らの前に座った。

駒王丸は家臣らの視線が自分に向けられていることに緊張したが、兼遠のほうをちらっと見ると、兼遠が軽くなづいたのを合図に、幼い声ながら、はつきりと、澄んだ声で、

「皆々様方にはよろしくお頼み申します。」と述べ、頭を垂れた。

その凜とした表情に、兼遠をはじめ、家臣ら一同は心をうたれた。つい先日、実の父を討ち取られたというの

に、なんと気丈なことか。普通なら恐怖に泣き叫び、手に負えないものだが、やはり、源氏の由緒ある血筋をひく和子であることよと兼遠は駒王丸を見守った。

「次郎、四郎、こちらへ」

兼遠が声をかけると、家臣団の後ろに控えていた2人の男の子が、駒王丸の前に着座した。二人とも、力強い目をしてはいたが、どことなくあどけなさも感じられた。

「駒王丸殿、こちらに控えし2人は我が息子にごぞる。次郎と四郎、いずれもやんちゃな息子であるが、これからは兄弟と思い、家族同様に、心安らかに暮らしてくだされ。」

「次郎にごぞいます。私は駒王丸様より年長ですから、兄のように思うてくだされ。」

続いて四郎が挨拶をした。

「わしは四郎じゃ。駒王丸様、よろしく。」
「こら、四郎、きちんと挨拶ができんのか。馬鹿もの。」

「うへー。だって、家族同様にと言ったのは父上ではありませんか。」

「うーん、まあ、そのだなあ・・・」

家臣団の中から苦笑が起こった。その雰囲気と和んだのか、駒王丸が次郎・四郎に向かって笑顔で

「駒王丸でございます。これからお世話になります。」と挨拶した。

久しぶりのほほえましい様子に、夫義賢が亡くなったあと、必死で駒王丸を守ってきた小枝御前の目には涙がうかんでいた。

次回もお楽しみに。

問い合わせ 観光振興課

☎(67) 1760 内線732



オーディオドラマ

猛将 木曾義仲

～ 乱世に開いた希望の花 ～



木曾 義仲(1154年～1184年)

平安時代末期の武将。

武蔵国(現在の埼玉県)に生まれる。幼名は駒王丸。

2歳のときに父 源義賢が殺され、信濃国(現在の長野県)に逃れ、中原兼遠の庇護のもと成長する。

治承4年(1180)以仁王の平家追討の令旨を得て、平家打倒のために挙兵。

寿永2年(1183)北陸道を通して京へ進軍する途中、10万の平家軍と倶利伽羅峠で対峙、奇襲作戦「火牛の計」によって平家の大軍を撃ち破る。平家の都落ちの後に入京。

朝日(旭)将軍の称号を賜る。新しい政治を志すが、源頼朝と対立。

寿永3年(1184)粟津ヶ原で討ち死にする。享年31。

日本各地に義仲ゆかりの史跡・伝承が残されている。

木曾義仲役
吉野 裕行

巴役
能登麻美子

葵役
高垣 彩陽

今井兼平役
石井 真

オーディオドラマ「猛将 木曾義仲～乱世に開いた希望の花～」がパソコンで試聴できます。
<http://www.yoshinaka.info/>



乱世を駆け抜けた武将

木曾義仲ゆかりの地

小矢部市

[富山県]



源義仲騎馬像(埴生護国八幡宮)

国の為、君のためにして
これを発す
家のため、身のためにして
これをおこさず

平家物語「木曾願書」



源平ロマンに想いを馳せて
義仲と巴御前の生涯を歴史ドラマに

<http://www.yoshinaka.info/>

小矢部市では、全国の木曾義仲・巴御前ゆかりの自治体、関係団体と連携して、義仲・巴御前のドラマ放映実現に向けた活動に取り組んでいます。ドラマ誘致活動への応援をお願いいたします!

平安時代末期、平家追討の令旨を受けて挙兵した源氏の武将 木曾(源)義仲。倶利伽羅峠の戦いで平家の大軍を撃ち破り、源氏一族の中でいち早く京都に進軍した義仲は、新しい時代の礎を築きました。



火牛の像(倶利伽羅古戦場)

牛の角に松明(たいまつ)をつけて平家軍を襲わせる奇襲作戦「火牛の計」。古戦場には2頭の火牛の像が立ち、激戦の様子を今に伝えている。古戦場一帯は春には八重桜が咲き誇り、多くの花見客で賑わう。

義仲とともに戦った巴御前は、一騎当千の兵にして容姿端麗な女武者といわれ、義仲との愛と別れの悲劇が伝えられています。また、義仲と樋口兼光・今井兼平ら義仲四天王をはじめとする家臣たちの堅い絆で結ばれた数々の逸話からは、義仲が義理人情に厚く、魅力的な人物であったことがうかがえます。



源平倶利伽羅合戦図屏風(部分・倶利伽羅神社所蔵)



国指定重要文化財
埴生護国八幡宮

創建は養老2年(718)。木曾義仲が合戦に先立ち奉納した戦勝祈願文を拝観することができる。勝ち運・恋愛成就のパワースポットとしても注目を集めている。



小矢部市観光課
TEL 0766-67-1760
小矢部市観光協会
TEL 0766-30-2266

アクセス

東京駅	北陸新幹線(2時間30分)	新高岡駅	石動駅
大阪駅	特急(1時間30分)	敦賀駅	石動駅
名古屋IC		金沢駅	小矢部東IC

東海北陸自動車道(約2時間30分)



義仲・巴HP

〒932-8611 富山県小矢部市本町1-1 <http://www.oyabe.info/>